志津川の中学生を招き応援する「海の虹プロジェクト」

南三陸志津川と若狭京丹後を結ぶ

京都府北部の港町舞鶴の西を流れる由良川の、そのまた西を流れる岡田川流域、西方寺平（さいほうじだいら）と呼ばれる小さな山里の沢は、大雨の影響で倒れた竹や樹木がそこかしこにあり、行く手を阻みます。「本当にここを通るの？」と大人でさえ躊躇するなか、宮城県南三陸町から来た中学生 20 人は腰まで水に浸かり、傾いた竹の下を潜り、倒木を越え、ときに歓声、ときに悲鳴を上げること２時間半、全員が無事に沢を登りきりました。

被災地の子どもを京都に招いたと聞くと、思い浮かぶ行き先は清水寺に銀閣寺・金閣寺などの世界遺産というのが一般的な発想ですが、京都生協職員ボランティアがそんな凡百の企画を立てるはずありません。現地初日の 18 日こそ、市内観光の時間がありましたが、その日の夜に綾部市の廃校を改装した宿泊施設で寝泊りすると、翌朝には一路北へ、山と川と海に囲まれた京都のワイルドサイドに一行は向かいました。

沢登りを楽しむ参加者たち。
子どもたちの歓声があたりに響きわたる。

手付かずの自然な川での沢登りが行われる一方、地域再生の拠点となっている「大庄屋上野家」では、地元京都生協の組合員・職員に、沢登りに行かなかった６人の女子生徒も混じってカレーをつくり、帰りを待ってました。地元で採れた夏野菜と地元の鶏をふんだんにつかったカレーの味を女子生徒に聞くと「ピーマンの味がする」という声。それこそ舞鶴市発祥の京野菜、「とうがらしの王様」と呼ばれる万願寺とうがらしです。

昼食後、近くの畑で実際に万願寺とうがらしの収穫と選果を体験。昼下がりの強い日差しの下での作業で、日差しを遮るものの無い畑での作業に大粒の汗が流れます。カレーづくりを手伝った遠藤想（えんどう・こころ）さんは、自分で作ったものと思うと、食べたことがないものでも平気だったと発見を口にしました。

夕食は、西方寺平のてっぺんにある民家を改装した「雲の上ゲストハウス」でのバーベキューで、収穫したばかりのとうがらしもいただきました。そこに地元の合唱サークル「ピチピチガールズ」がやって来て、「ぞうさん」「故郷」など見事な３部合唱を披露してくれました。「大変なことがあったけど、神様は一人ひとりを見ている。私たちもずっとあなたたちを気に掛けている」というあいさつに、普段はシャイな中学生も感じ入り、最後は一緒に「故郷」を歌いました。

仮設住宅などに暮らす被災した中学生を、自分たちの里山に迎え入れる。地域再生のコ

ーディネートをする布施直樹（ふせ・なおき）さんは、ゲストハウスを抑えておくよう京都生協ボランティアから連絡があった時点で、こうなる予感がしたそうです。そこには地域に元気を取り戻す仲間同士の阿吽の呼吸がありました。

「海の虹プロジェクト」に込められた思い

京都生協職員ボランティアは、みやぎ生協、宮城県漁協志津川支所を介して、炊き出しや牡蠣の養殖に必要な資材作りなど、津波で甚大な被害を受けた宮城県南三陸町の支援をこれまで６回にわたり継続して行なってきました。被災した方が多く住まわれる登米の仮設住宅でも活躍は知られ、被災地との信頼関係はこの間に確たるものになっていました。

震災から１年半を経過した際に行った、南三陸町へのボランティアにて、これからの支援のあり方の参考にしようと、仮設住宅の子どもたちに「今何がしたい？」と聞いたところ「離れ離れになった友達と一緒に遊びたい」という声が返ってきました。この声で方針が決まりました、それなら自分たちが、自分たちにしかできないやり方で、この思いを実現させようと。

もともと京都生協職員ボランティアのこれまでの支援活動も、いろいろな食材を提供してくれる産直生産者などのお取引先、遠征費用を捻出する朝市などの即売会の運営に関わってくれるたくさんの職員や組合員など、京都生協がこれまで培ってきたネットワークに支えられてきました。

被災地に行くのではなく、被災した子どもを迎えるという話に、そうした人々が黙ってはいませんでした。南三陸支援ではいつも一緒の鳥取県畜産農協は、今回も共催者として名乗りを上げ、鳥取牛のバーベキューにホルモン焼きそばを用意しました。京都生協の北ブロックの組合員は昼食づくりを引き受けました。京都初日の夕食を請け負った京料理屋は「原価だけで充分です」と言って、とびきりの京料理を準備しました。ツアー前日の説明会から足掛け６日間、今回のボランティアに関わった生協組合員・職員は延べ数百人に上ります。

一方、受け入れ側さえ準備すれば、参加者が集まり、実現するというものではありません。送り出す方にも汗をかいてくれる人がいたからこそ企画は実現しました。みやぎ生協ボランティアセンターの須藤敏子（すどう・としこ）さんの呼び掛けに始まり、宮城県漁協志津川支所運営委員長の佐々木憲雄（ささき・のりお）さんは地元南三陸町の教育委員会に掛け合い、登米の仮設住宅に住む松岡良奈（まつおか・らな）さんは１軒１軒回って歩き、地元ＦＭ局も告知を何度も入れてくれました。

こうして集まった 26 人分の申込ハガキは、一人ひとりの物語が浮かび上がる思いのこもったものでした。「この子たちのために」と投げられたボールは、しっかりと受け止められました。

子どもたちの心に残ったものは

滞在４日目となる 20 日は、京丹後市弥栄町野間地区の、境内に樹齢 400 年の椎の木がある延命寺に活動の拠点を移しました。受け入れたのは地域組織、渓里野間（かわざとのま

）の人々。ここで副区長を務める飯島篤（いいじまあつし）さんが「三陸に宝の海があるように、野間は水と緑の里。皆さんを招くことができてうれしい」とあいさつをすると、地元のおばあちゃんが作った足半（あしなか）と呼ばれる水中用の短い草鞋を手に、一行は清流野間川へ。岩魚（いわな）をつかみ、川遊びを楽しみました。

戻ってきた子どもたちを待っていたのは、バーベキューに加えて流しソーメン。そして、「日本一の丹後のお米でつくった」というおにぎりは丹後地域の生協組合員が用意しました。子どもたちが川で力いっぱい遊び、寺の境内や大木の木陰で西瓜を食べる風景は、何十年も前、この地域に普通にあったものでした。

今の野間地区の人口は200人ほど。かつては数十人いた小学校も2012年度の現在では、在校生5人で、年度末には廃校の予定です。高校、中学と続き、小学校が無くなることはこの地区に住む人の心に大きな喪失感を与えました。

渓里野間の岡本毅（おかもと・つよし）会長は言いました。自然環境を大切にした農業に取り組み、自分の周りの人に安全なものを食べさせたいという思いでやってきたことが川のドジョウやタニシを守ることにつながったと。そして子どもたちに向け、「野間にまた来てほしい。あなた達を受け入れることが野間を守ることにつながる」と結びました。

お寺の椎の木を指して、激しい風雨や丹後の厳しい雪に耐えてきたからこそ強く立派な木になったと言う消防団副団長の羽賀義昌（はが・よしまさ）さんは、自分たちの村は時代の流れのなかでじわじわと小さくなってしまったけど、ここが好きで、ここで生きていきたいという思いは南三陸のみんなと同じだと参加した子どもたちに呼び掛けました。

今回の企画のルールとして、出会った人とのお別れの際は、みんなを代表して参加者があいさつをすることにしています。初日は「美味しかったです。ありがとうございました」くらいだったあいさつも、この日になると、「イメージしていた京都と違って、びっくりした」「とても暑かったけど川は楽しかったし、良いところがたくさんあった」「自分たちの学校も生徒が減って大変。町の復興のために何かしたい」と自分の意思を口々に語れるようになりました。

京都の方（黄色いシャツ）からお土産を手渡される参加者。地元の人と話す機会が多くあった。

今回の企画に参加した南三陸の26人は3つの中学校から構成され、仲の良い友達同士の参加もあれば、あまり知り合いのいない中に飛び込んだ子もいます。受け入れた京都の里山の人々、食事から洗濯ま4泊5日の行程をサポートした生協の組合員・職員、鳥取から掛け付けた生産者など、出会った人すべてが、自分たちのために汗を流してくれたという事実は、参加者一人ひとり分け隔てなく「自分たちを応援してくれる人がこんなにいるんだ」という思いを刻み、心に残る取り組みになったのです。